

七十周年記念事業

本校は今年度、昭和十四年相馬商業学校として開学以来七十周年の節目の年を迎えた。その間、先輩校の原町高等女学校と統合し、昭和二十三年学制改革で福島県立原町高等学校となり、昭和五十年には小川町校舎から現在の西町に移転するなど大きな変革を経験し、二万五千有余人の卒業生を社会に送り出してきた。

七十周年記念事業は、平成十七年度同窓会総会において「寄付金は募らないで積立金内で企画する」「新規の建造物は考えない」「同窓生として誇りの持てる事業とする」とされた基本方針に基づいて、同窓会会長を始めとする八名の企画委員会から始まる。

平成十九年十一月の実行委員会発足のための準備会において事業・組織・予算等の概要が固まり、翌年二月に第一回実行委員会を開催。渡辺一成同窓会長を委員長に、同窓会・後援会・PTA役員と本校教職員による実行委員会が発足した。

具体的な事業の企画・運営は「式典」「講演会」「祝賀会」「記念誌」の各専門委員会が担い、平成二十一年五月の第五回までの実行委員会においてその内容が審議され、実施されていった。

記念事業の先駆け

五月三十一日(日)、南相馬市民文化会館「ゆめはつと」において、小山田浩顧問率いる吹奏楽部の第二五回定期演奏会が最初の記念行事として開催された。

第一部の生徒によるクラシック演奏に続いて、第二部は吹奏楽部OBの同窓生による「オセロ」(指揮も同窓生の北野英樹氏)、そして、第三部には大先輩方への取材の成果が実った原高の七十周年の歴史を織り込んだステージ。満場の観客の中には、本校の同窓生の方々も多数おり、往時を偲んでおられた。

生徒が創りあげる式典

式典前日午後の「ゆめはつと」では、会場係・講演会係によるステージ・受付場所等の準備に始まり、進行・挨拶、箏曲・吹奏楽等の練習が入念に行われた。

九月五日(土)、生徒は十時までに「ゆめはつと」に集合。式典予行が行われた。朝は曇天模様であったが、次第に青空が広がり、ほんのり汗ばむ程度の恵まれた気候であった。



十三時十分、濱須美貴先生と箏曲部のステージ上での演奏の中、来賓の方々の入場が始まる。そして、十三時三十分吹奏楽部によるファンファーレが高らかに鳴り響き、八津尾和孝生徒会副会長

の開式のことばにより、原町高校創立七十周年記念式典が開幕。国歌斉唱・黙祷・八巻義徳校長の式辞・実行委員長挨拶・県教育委員会委員長挨拶と続く。

感謝状贈呈は、歴代校長(冨塚喬夫・須田敬・日下部健一・柴崎茂・三島信幸)、歴代PTA会長(鈴木清重・坂本典久・赤石澤啓雅・愛原利昌・石川俊・鎌田博幸)、前同窓会長(門馬直孝)、そして特別功労者としてシドニー・アトラントア両オリピック出場の内洋行と箱根駅伝で三年連続最優秀選手賞の今井正人の各氏に。

太田豊秋原町高校後援会長、県高等学校協会副会長日下部文紀相馬高校校長の来賓祝辞、来賓紹介並びに祝電披露、冨塚元校長の受賞者代表挨拶と進み、生徒会役員と吹奏楽部有志により相商と原女の校歌(小山田浩編曲)が澄んだ歌声によって紹介された。

「新しい原高の歴史を作っていくという私たちみんなの力で」との十名の生徒会役員による「誓いの言葉」も久保田千尋生徒会長による生徒代表挨拶も、凛々しく清々しく、伸びゆく原高生の明日を感ぜさせるものであった。

偉大なる先輩の言葉

式典に続き、十五時より石崎光夫氏(本校12回卒、元国際協力事業団東京国際センター所長)による「開発途上国の『人づくり』支援三十余年の想いを語る」記念講演会

が催された。ベトナムなどでの途上国支援の経験を通して、「人づくり」の重要性と喜びや、国際的視野に立ったものの見方等について、老若男女にかかわらず多くの参加者にとって啓発されるお話であった。

講演会後十七時三十分より、石崎氏や感謝状を贈呈された方々をかこんで、ホテルラフィエスで祝賀会が開かれた。会は会費制で約百人が参加。実行委員長・校長・後援会長がそれぞれ挨拶し、七十周年記念事業の成功を祝い合った。

式典前日から当日にかけて「ゆめはつと」多目的ホールにおいて、「原高美術展」が催された。在校生の作品二五点、ここ一〇年を中心とした卒業生の作品一五点、そして同窓旧職員・現旧職員の賛助出品一一点。さらに、当日会場に展示してほしいと同窓生の方が持ち込まれた絵が一点。計四二人の絵画五二点が、式典受付場所の前で、創立七十周年記念式典に、芸術の薫り高く華を添えた。

美術部は、県総合美術展覧会において教育長賞を昨年度北野玲奈君、今年度富田千風優さん(出品作「猜疑心の融解」にて)が受賞するなど、番匠あつみ先生のもとレベルの高い作品を生み出している。

生徒たちの若々しい感性に、諸井時男・朝倉悠三・谷田部健二等々の諸先生方の完成された作品が並び、見応えのある美術展となった。なお、作品の搬入・搬出に当たっては、陸上競技・硬式テニス・ソフトテニスの各部門も協力。原高生の和が、美術展成功の陰にあった。

名称からもわかるように、六十周年記念誌『自由の鐘』の後を継いで、式典時の記念の品であると同時に、『百年史』の資料としてこの一〇年間の原高の変遷と関連資料をまとめたものである。

内容は以下のとおり。表紙 旧職員朝倉悠三氏による題字と原高生の朝の通学風景紫紺はスクールカラー表見返し この一〇年の卒業学年の集合写真を背景に原町高校校歌の歌詞

あいさつ 校長・実行委員長・後援会長・PTA会長・生徒会長
原町高校この一〇年のあゆみ六十周年記念式典の様子平成十二〜二十一年度の沿革・各部の活躍等と写真、当該年度の生徒会長(副会長も含む)の思い出の記
原高生の活躍 この一〇年間に東北大会・全国大会等で活躍した各部の記録と思い出の記
原高小史 合唱コンクール発足当時のエピソード
足當時の寄せることば 原高を支えてくださる同窓生からのことば
活躍する同窓生 作家・TV局プロデューサー・オリンピック選手等、各界で活躍する同窓生の略歴と生の声
同窓生作品紹介 寄贈いただいた同窓生・旧職員による著作を収める「柏曜文庫」の一覧と主だった著者・作品の紹介

我が師の愛はとこしえに『自由の鐘』で語られた原高草創期の先生方の次の世代的な名物先生をかつての教え子がエピソードを交えて人と語り語る

資料・統計 歴代校長・同窓会長・PTA会長名、平成十二年以降の旧現職員一覧、学校組織、平成十二年以降の進路状況、卒業生累計

裏見返し 相馬の原頭・勝ち歌・聖水の水・原町高等学校応援歌の歌詞
一六〇〇部を印刷し、記念式典参列者に配布し、また、県立高校や地元自治体・中学校等関係諸機関へ送付した。

古室理・菅野郁子両氏の文章に誤植があるなどの大変申し訳ないミスもあつたが、かつての原高を愛する方にも、最近の原高を見つめる方にも、心に残る記念誌となった。

原町高校は、現在の西町校舎の前に、二つの校舎を歴史に持っている。原町高等学校と原高小川町校舎である。原女跡地は現原町第一中学校。かつては原女跡地を示す木製の碑が建っていたが、風雨のために朽ちてしまった。

小川町校舎跡地は原町区福祉会館である。そこには門馬前同窓会長と有志が昭和五十九年に建立した乙女の像とともに原高跡地とわかる学校沿革の記載があるのだが、県道からは見えにくい。そこで、七十周年を記念して、あらためて学び舎跡地に記念碑を設置することとした。

原女跡地の碑は原町一中の正門付近、相商・原高跡地の碑はサンライフの敷地の北東角(県道の信号機の所)に。それぞれ高さ約一七〇cmの石碑が、かつての夢の跡を見守っている。

記念事業の反省を議題とした第六回実行委員会が開催された。

今回の記念事業は、七十

の伝統を胸に刻みながらさらなる発展を心に期す、地域の基幹校としての誇りに満ちたものとなった。同時に、生徒・同窓生・保護者・教職員が力を合わせ、さらに地域の多くの方々の御理解と御協力に支えられた温かい事業であったと言えよう。

完了として八十周年へ
すべての記念事業が完了した十一月十七日、会計報告と